

# 計画案の夢

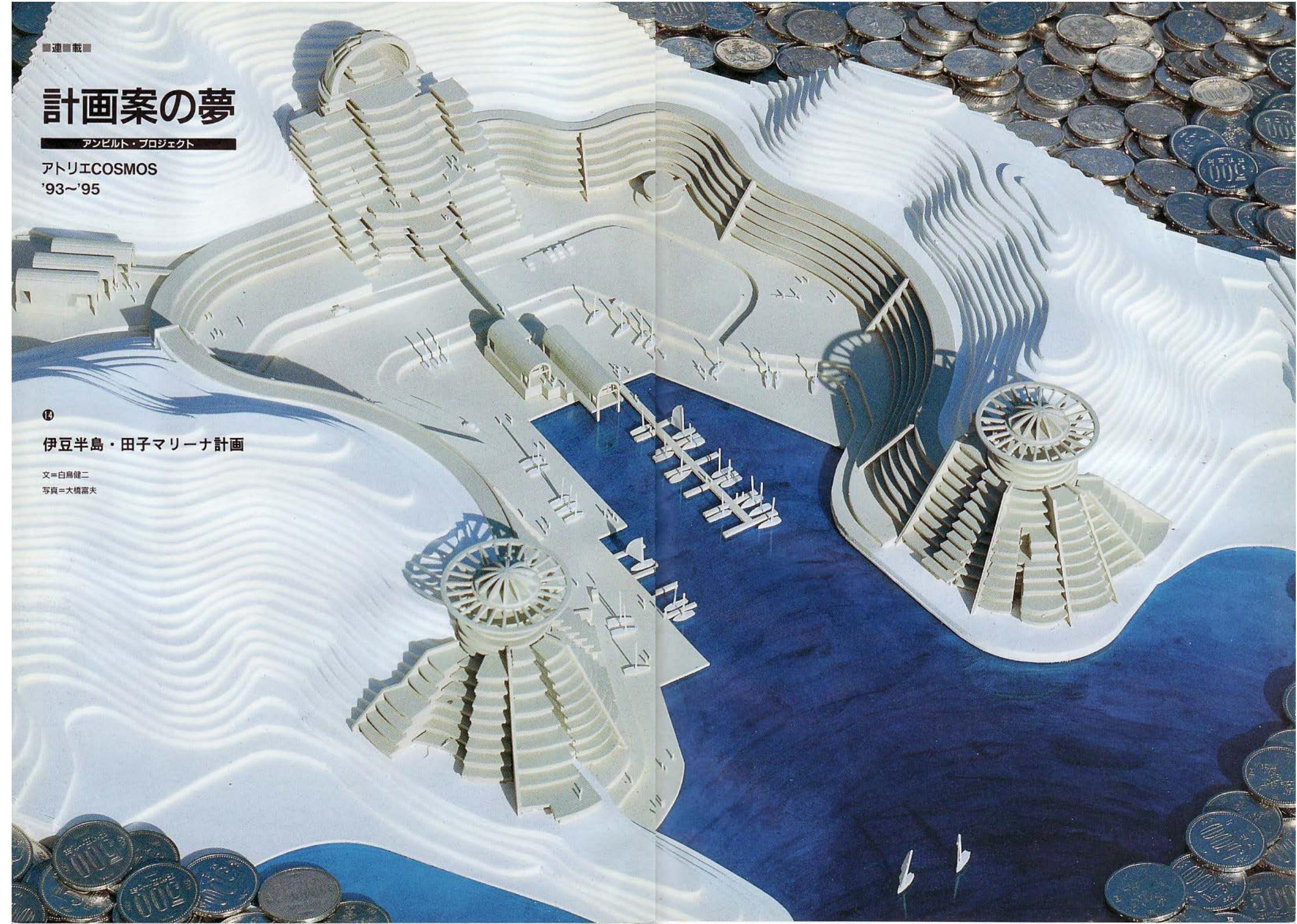
アンビット・プロジェクト

アトリエCOSMOS  
'93~'95

14

伊豆半島・田子マリーナ計画

文=白鳥健二  
写真=大橋富夫

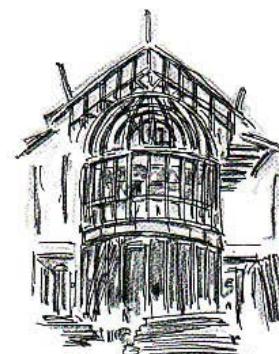


# 伊豆半島・田子マリーナ計画 ——作るべきか、作らざるべきか—

一度は実現の夢を断念した計画案が、その後チラホラと息を吹き返していると述べた。バブル経済の崩壊で打撃を受けた経済状態が、ここにきてすこし持ち直してきたためか、前号で紹介した「枕岡寺の家」に引き続いだ「玉川の家」（昨年10月号で紹介）も、その後の看病（？）の甲斐あって、今では立派に息を吹き返し、毎日スクスクと育っている。姿形がそこへしつづけてきた。

昨年の10月号で「玉川の家」と一緒に登場した「鎌倉・光明の家」という計画案は、完全にボツとなってしまったが、命的な円形空間が、切妻型の在来空間に貫入していくというイメージは、雪深い新潟県六日町に建つ複合商業施設に大きくその姿を変え、今実現に向かっている。

一度はクライアントに見放され、バブル崩壊の余波に見舞われ、死に体となった数々の計画案。あるものはイメージ模型として、またあるものは精密な模型として大切に保管してきたつもりだ。だからこのように生き返る計画案も出てきたのかも知れない。



△玉川の家工事風景 (毎日スクスクと育っている)

ところで、「田子マリーナ」という計画案であるが、大柄大きな実施プロジェクトで、当アトリエにおいては、まさに空港後とも言える開発計画であった。ある大手ディベロッパーからの依頼によるこの大仕事は、バブル絶頂期に計画の事業化が決定されたが、バブル崩壊と共に海のもなく戻していった。

先日、アメリカの友人にこの計画案を見せたら、夢で終わって良かったというのである。大変な環境破壊だという。「建築家」というのはそもそも口がうまく、難解な文章を振りかざし、とどのつまり自分のやっていることは正しいのだと言論付ける」という、私の別の友人で先

輩の建築家は、長らく建築の設計を続けていたが、物を作ることに対して常に懷疑心をいだいているという。本当は作らないことがベストなのだが、そうもいかないので仕方なく作っているらしい。毎日ストレスがたまるそうである。

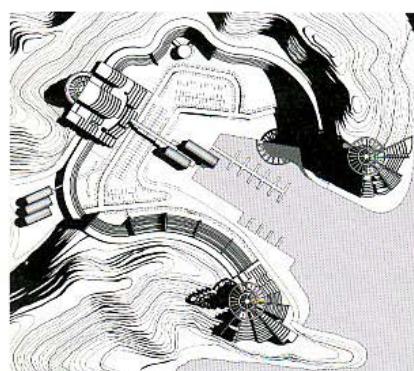
こんなことを考えていた矢先に、私は東京大手町で開催された、都市デザインに関する国際シンポジウムを開く機会を得た。

会の司会進行役で、都市計画家の伊藤謙氏は、「ノーと言える建築家は日本には一人も居ない。いや世界のどこにも居ないかも知れない」と言う。「こんなことをこのまま続けていると、建築家はいつまで経っても社会的に認知されない」と、会場ロビーで私ごときに語ってくれた。

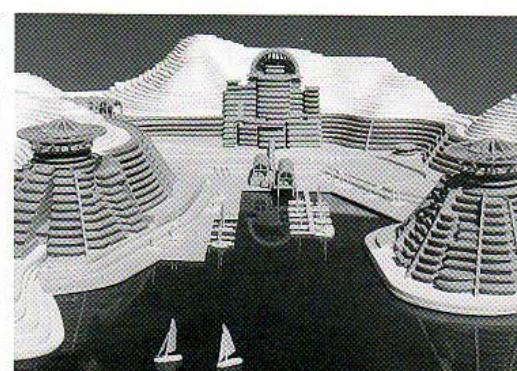
私は田子マリーナ計画に、大きな夢を込めたりともある。そもそも、これをスタートするずっと以前から、この種の計画案に縁があった。1968年から69年にかけて少しの間、ロス・アンゼルスのシーサー・ペリのもとに居たことがある。氏のもとでウイーン国連本部のコンペ応募のための下働きをしていた時、私は偶然、ペリのサンタモニカ山麓部のアーバンニューキュラスという計画案の模型を見た。

カヘンというか、強いショックを受けた。兎に角、すごい迫力だ。山麓部の斜面に展開する建築コンプレックスの大観に思わず感動してしまった。大胆でありながら実に有機的であった。田子マリーナ計画は、何よりもこの予想せぬ感動が出发点となっている。

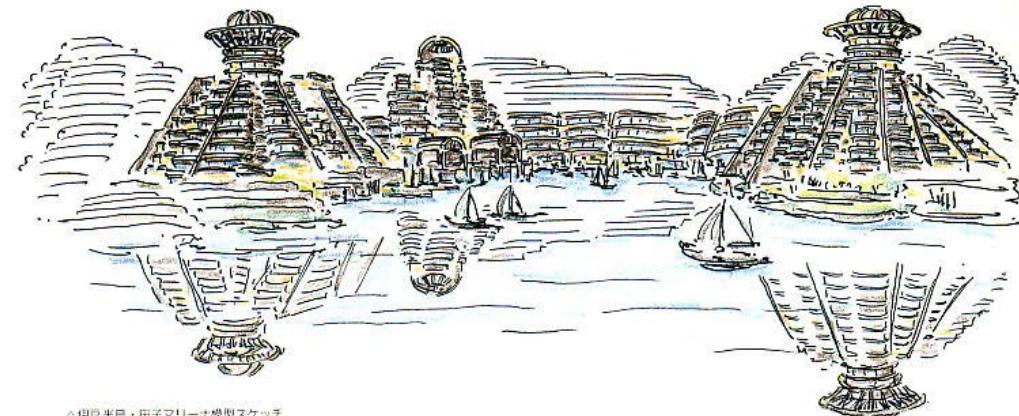
具体的には、①山と谷が交互に入り出する斜面に建築物を抱き合わせる。②つまり、建築物を山の出入に同調させながら、全体を有機化していく。③山の尾根の稜線を基本的に保存しながら足元の部分に手



▲伊豆半島・田子マリーナ計画全体配置図



▲伊豆半島・田子マリーナ模型写真



△伊豆半島・田子マリーナ模型スケッチ

を加える。しかも、③の足元の有機的でリニアな建築が山の一部、もしくは、すでに露出している足元の岩盤部分の化身の如き状況を呈することを願っての建築計画とする。CAVE DWELLINGのようなイメージが少し頭の中にあった。

私は物を作ることへの懷疑心はどこにもない。しかし、「本当は何も作らないことがベストなんだ」と言う先輩の叫びも、私の体の奥深いところに、グサッと突きささげていることも確かだ。リサイクルとか、再生保存という、21世紀的テーマとは確かに相入れないものがある。不思議なことに、いつも田子港に来るたびにますます最初にすることがスケッチだった。この港を母港として、長い間活躍してきた旧式の漁船達、彼等の出港も最近はめっきり少なくなった。港から引き上げられ、じっと沖合いを向きながら次の出港を待っている。そんな風に見えたからだろうか。私には彼等の姿形が生きているように思えて仕方ないのです。

この漁船を、漁場を、そして漁師達の職業そのものを、大手大資本は、大量のお金をバラ

まいすべてを買上げてしまおうというのである。やがてここには、スマートな船体を有した豪華ヨットがひしめきあう。マストが林立し、その合間に錨って若い男女がニューライフを調和する。私も少々ストレスがたまりそうである。

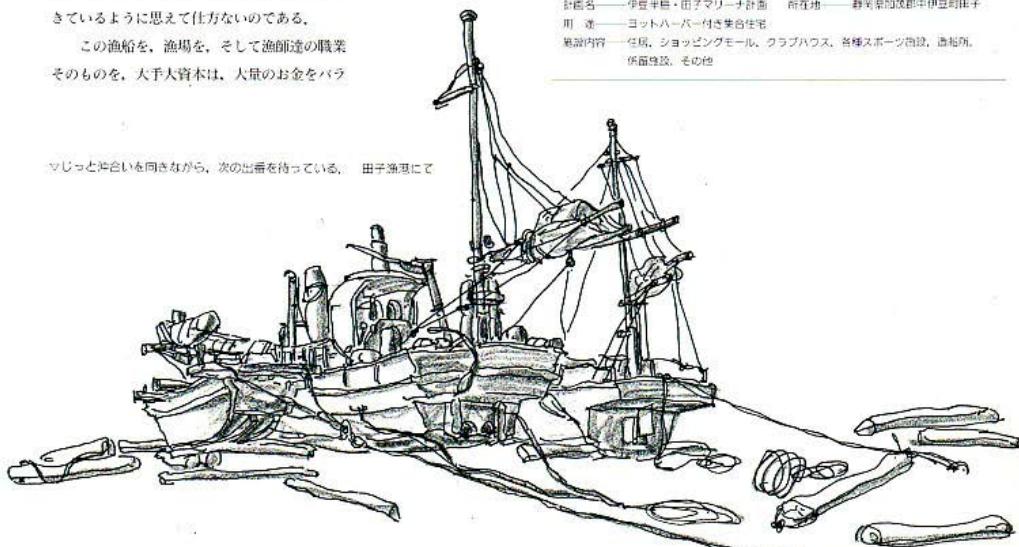
私は建築家に夢を託している。世の中の数ある職業の中で、複雑多岐にわたる諸問題を「形」に還元することによって解決をはかるとする機能は建築家だけのものだ。しかも、美しい「形」にして問題を開拓しようとするところが、羨ましい。

伊藤謙氏は、こんな言葉を残してエレベーターで降りていった。ドアが閉じる時の氏の表情が、今でも忘れられない。

## 資料

計画名——伊豆半島・田子マリーナ計画 在地——静岡県沼津市伊豆町田子  
用 途——ヨットハーバー付き豪華住宅  
施設内容——住居、ショッピングモール、クラブハウス、各種スポーツ施設、造船所、  
保養施設、その他

マジっと沖合いを向きながら、次の出港を待っている。田子港にて



■約2年を費して描いた、足利タイオの「船の力」が「海の力」、「海の力」が「船の力」の脚りでした。で表にお絵が描いています。